

いわて防災学教室

災害から学び、災害に備える



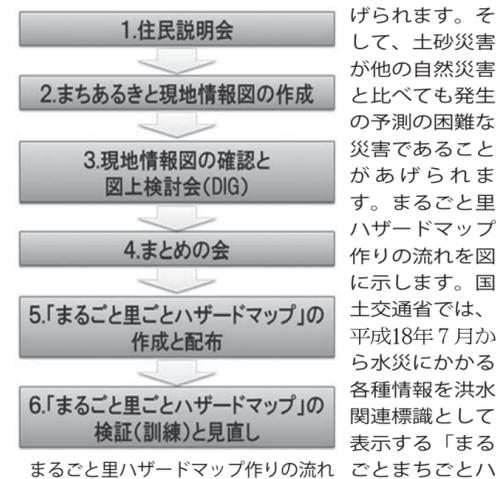
住民と共に創る土砂災害ハザードマップ ～全国初のまるごと里ハザードマップ作りがスタート～

岩手大学農学部森林科学科教授

井良沢 道也

近年、極端な大雨の発生などにより全国的に土砂災害が多数発生しています。県内でも台風10号により岩泉町、宮古市はじめ被害が発生しました。土砂災害から身を守るためには、行政による対策(公助)だけでは限界があり、普段から自分で身を守る(自助)ための行動・考え方を学び、地域の住民が協力してお互いを助け合う体制(共助)をつくることが重要です。特に「自助」だけでは解決が困難なことに対して、住民や自主防災組織など、地域で協力して助け合う「共助」の充実を図ることが重要となります。「共助」の充実を図るために、地域住民の方々が意見を出し合って、地域の危険箇所をまとめた「地図」を作成することが手段の一つとしてあげられます。この地図は地域ぐるみで早めの避難体制をとることや、要配慮者対策などの検討を行うための有効な道具となります。本稿では今年度より、国土交通省東北地方整備局新庄河川事務所と岩手大学とで共同で実施し始めた全国初のまるごと里ハザードマップ作りについて紹介します。実施場所は山形県庄内町木の沢地区です。本地区は月山(1984m)を源にもつ暴れ川の立谷沢の氾濫区域であり、さらに地区内に土石流危険区域と急傾斜危険区域をそれぞれ3箇所ずつ持っている集落です。

こうした取り組みのきっかけとなったのは土砂災害ハザードマップが全国的にも作成が遅れていること、また作成されていたとしてもハザードマップについて住民の方々の理解に差が大きいことなどがあ



ザードマップ」を推進しているが、砂防版として「まるごと里ごとハザードマップ」と呼び、避難誘導標識の他に手作りの避難経路図の作成に取り組むこととしています。

今年の8月22日に住民説明会を開催し、9月17日にまちあるきと現地情報図の作成、10月23日に図上検討会(DIG)を実施しました。岩手大学の私の研究室の学生達も参加しました。今後は図に示すようにハザードマップの作成と配布、避難訓練を来年度に実施する予定です。「まるごと里ごとハザードマップ」をやってみて感じたことは、実際に地域を歩くことで、行政の防災マップなどには書かれていない、雨の時に普段から危険だと住民が感じている場所や、避難所までの経路・かかる時間などについて、参加者全員が共通の認識をもつことができたことです。図上検討会(DIG)でも住民から様々な意見が出され、地域の一体感を感じました。マップについては「作って終わり」ではなく、地域の安全・安心のために継続的に使ってもらえるようにすることが重要です。こうした取り組みが全国的にひろがるの良いと思っています。



2016年9月17日に山形県庄内町木の沢地区で実施したまちあるき



2016年10月23日に山形県庄内町木の沢地区で実施した図上検討会(DIG)